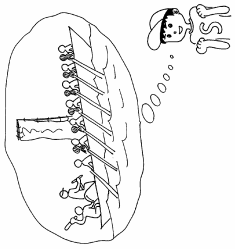
（前置き）

大崎上島は昔、海運業や造船業で栄えていました。櫂伝馬はこの辺で一番速い船でした。そして大きな船の水先案内をしたり、海賊から船を守ったり、島で病人が出た時は救急車の役目をしたりしました。さらに遭難した船があれば、一番にかけつけて救助もしました。

大崎上島東野地区では、毎年八月に(1)住吉祭が行われます。この住吉祭は、海の安全や島の繁栄を願って始まり、二〇〇年の歴史があります。住吉祭の行事の中に、櫂伝馬競漕があります。櫂伝馬には十四人のこぎ手と(2)台振りや(3)剣櫂振り、(4)太鼓、(5)大櫂といわれる人も乗り込みます。またそれを支えるために準備や(6)炊き出しなど、地域を挙げて祭りを盛り上げます。

大崎上島　東野の櫂伝馬



大崎上島東野地区では夏になると住吉祭が催され、有名な櫂伝馬競漕でにぎわいます。櫂伝馬競漕とは地域ごとに船を出し速さを競うもので、祭りの見どころの一つとなっています。

「早く櫂伝馬に乗ってみたいなぁ。」

さとしは、櫂伝馬競漕に毎年あこがれ続けてきました。そして今年は五年生、やっと櫂伝馬に乗ることができる年になりました。八月に入り、子ども櫂伝馬の練習日がやってきました。

桟橋に着くともう古江や盛谷、白水の櫂伝馬が来ていました。太鼓をたたくおじさんや船頭のおじさんたちが、櫂の準備をしてくれています。

「よーし、行くぞ！櫂をみんながそろえんと前に進まんぞー。力いっぱいこげよ。おじさんが太鼓をたたいたら、大きな声でかけ声かけてくれーよ。」

「はーい！」

みんな張り切っています。さとしは櫂をぎゅっと握りしめました。

「ドンド　ドンドンドン　ヨイサッ　ドンド　ドンドンドン　ヨイサッ。」

さとしは言われるとおりにやってみようと思うのに、櫂が重くて思うように動きません。

「そこ、四番櫂！しっかり漕げ！」

「体全体でこぐんじゃ。体を前に倒せえ。声出せえ。」

「ヨイサのかけ声に合わせて櫂を引くんじゃ！」

「大きな声出さんと、櫂がそろわんぞお。」

櫂をそろえてこぐのに精一杯で、声どころではありません。くたくたです。暑くて汗がだらだら出てきます。のどもからからです。

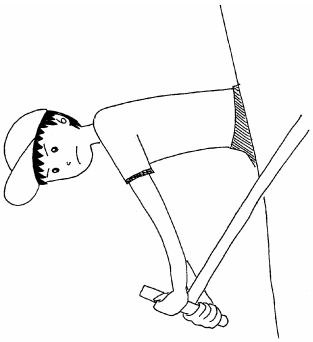
でも練習は続きます。一人だけ休むなんてできません。さとしは、だんだん櫂を持つ手に力が入らなくなっていきました。

家に帰るとおじいちゃんが、にこにこしながらさとしに声をかけてきました。おじいちゃんは毎年祭りの世話をしていて、一か月も前から何度も話し合いに出たり、町中にちょうちんを飾って回ったりしています。

「さとし、櫂伝馬の練習はどうじゃったか。楽しかったろう。」
「うーん。」
「どうしたんじゃ、元気ないのう？」
「上手にこげんのんよ。あんなにしんどい子ども櫂伝馬なんか、何であるんかのお。大人がやるのを見るだけでええのに・・・。」
「そうか・・・。」
それを聞いたおじいちゃんは、ぽつぽつと話を始めました。

「子ども櫂伝馬が始まったのは、わしが中学三年のときじゃった。
それまで子どもは、大人の櫂伝馬練習が休憩のときにこがして
もらうとったが、祭りの当日はこがしてもらえんかったんよ。
それが祭りでも大人みたいにこげるようになったもんじゃけえ、うれしいてのう。」
「おじいちゃんは櫂伝馬、しんどくなかったん？」
「そりゃぁ、しんどいわい。櫂伝馬競漕は体力勝負じゃし、地区の代表いうプレッシャーがあるけんのう。あの頃は子どもも大人もようけおったけえ、ちょっとでも手え抜いたり失敗したりしたら、すぐに交替させられたもんよ。今はそのこぎ手も少のうなったのう。櫂伝馬もあと何年続けられるかのう。」
「えっ？櫂伝馬、なくなるかもしれんのん？」
「毎年こぐ人を頼んで回るんじゃけど、みんなどんどん年をとるし、出てくれる若いもんも少ないんよ。実際人数がそろわんいうて競漕に出られん地区も出てきようるしな。それに櫂伝馬や櫂や太鼓は年々傷んでくるから、いろいろお金がかかるんよ。逆に島の人口は減るけん、みんなの負担も大きいなってくるしのお。」
さとしは小さいころから見てきた櫂伝馬がなくなるかもしれないなんて信じられませんでした。さとしは何と言ってよいか分からず、おじいちゃんの顔をじっと見ていました。
「不思議じゃのう、櫂伝馬いうもんは。みんなでヨイサ言うて声を張り上げて櫂を合わせようたら、十四人の人間がひとつの船になったみたいにすぅーっと進むんじゃ。島全体がひとつになったようなあの感動は、櫂伝馬でしか味わえんかもしれん。今までわしもさとしのお父さんもみんなそれを味おうてきて、今年はいよいよさとしも・・・いうんが、わしゃあうれしいんよ。」
ふたりは、二子島の向こうに沈む真っ赤な夕日と櫂伝馬を、だまって見つめていました。

それから一週間がたち、今日は八月十三日。まばゆいほどの青空が広がり、いよいよ子ども櫂伝馬本番の日になりました。いつもは家からあまり出ないお年寄りも、この日ばかりは櫂伝馬競漕を見ようと杖をついて出かけ、桟橋の石段にこしかけています。島外からもたくさんの人が帰省していて桟橋は人でいっぱいです。「今年も櫂伝馬競漕が見られてよかったねえ。ありがたいねえ。」そんな会話が聞こえてきます。小さな子どもが「櫂伝馬ってなぁに？」と母親に聞いています。みんな暑い中笑顔で櫂伝馬の方を見て応援しています。



さとしたちが櫂伝馬に乗りこもうとすると、岸の方から「がんばりんさいよぉ！」と大歓声が上がりました。さとしは背筋を伸ばして櫂伝馬に乗り込み、おじいちゃんの顔を思い浮べながら櫂をぎゅっと握りしめました。

【注】

（１）　毎年八月十三日、東野地区沿岸および白水港周辺で行われる祭。

（２）　舟の面（おもて）で漕ぎ手を鼓舞する乗組員。

（３）　艫先に陣取り、剣をかたどった長さ一メートル強の櫂（剣櫂）を操る乗組員。

（４）　色鮮やかな女子供衣装に頭には花笠や鳥帽子をかぶり、唄に合わせて太鼓を打ち鳴らす乗組員。

（５）　櫂を握り、艫に進行方向を司る乗組員。

（６）　飯を炊き、人々に配ること。